

河口慧海への評価と人間関係

高山龍三*

Kawaguchi Ekai: Evaluations and Personal Connections

Ryuzo Takayama

東洋史家でチベット学者の佐藤長は「日本におけるチベット史研究」¹という英文の論文の中で、河口慧海を次のように評価した。1993年、慧海の没後48年目である。

日本のチベット史研究は、1877年『喇嘛教沿革』を発表した小栗栖香頂らによって、すでに19世紀後半から始まったが、彼らは北京などでチベット人やモンゴル人のラマ僧から学んだのであった。19世紀末ないし20世紀初頭何人かがチベットに入りその情報を報告した。その最初が河口慧海であった。その二度の旅行でさまざまな請来品をもたらした。その著作のうち旅行記はあまりにも有名だが、ほかにチベット仏教と文法など多くを書いている。河口慧海に次いでチベット入りした青木文教、多田等観と合わせてこの3人はチベットに関する入門書を書き、それは教育的役割をはたしたほかに、チベット史の内容も含んでいた。しかしそれは伝統的なチベット史を反映したもので、今日のチベット史学で認められるものとは異なっている。

上記3人と寺本婉雅らを含めて、チベット入国者はチベット史研究に大きく貢献したとはいえないが、彼らの記録は広い意味で日本のチベット研究の基礎をつくった。さらに河口慧海と多田等観にもたらされた蔵外文献には、歴史に関するものが含まれていた。それ

は次世代のチベット史研究に貢献した。これら初期のチベット入国者のことを述べるのは、これら先駆者に対して尊敬と感謝を表したいからである。

また日本のチベット学の中心、東洋文庫には河口慧海収集の文献が収められている。

なお後注で『チベット旅行記』²とその再刊版³、伝記⁴が簡単な解説つきで紹介されている。

ヤングハズバンド遠征とヘディン

河口慧海のチベット脱出直後、1903-4年にヤングハズバンドの遠征として有名な、英領インド軍のチベット侵入があった。それに参加した人たちが、いくつか記録を残している。すなわちそのスタッフL. A. ワッデルの『ラサとその秘密』⁵、同行したタイムスの通信員P. ランドンの『ラサ』⁶、同じくデイリー・メールの通信員E. キャンドラーの『ラサのヴェールを剥がす』⁷である。それらには、河口慧海のことがふれられている⁸。以上の三つの本はいずれも1905年刊行であり、慧海の英訳本『チベットの三年』⁹出版の四年前である。

ヤングハズバンド自身は「インド・チベット関係史とくに1904年の遠征」をまとめた『インドとチベット』¹⁰という本を、1910年に出版

* 文化地理学、ヒマラヤ地域研究

した。慧海の英訳本出版の翌年である。河口慧海をとりあげたヘディンの『トランス・ヒマラヤ』¹¹の第三巻の出版は、1913年であるので、ヤングハズバンドの紹介の方が早い。18ページにわたる19章「ラサの諸印象」の中で、河口慧海とその著書を紹介している。「勇敢な日本人旅行家、仏教徒でかつて日本の寺の住職」と書き、「(慧海の) もっとも価値ある著作で、その研究結果を英訳出版した『チベットの三年』」によると断ってラサの印象を述べている。

ヘディンと慧海について、ヘディン研究家の金子民雄は最近次のようにいう¹²。ヘディンのチベット行に対するパンチェン・ラマの好意ある後援には、河口慧海のとりなしがあったのではないか。ヘディンが来日したとき、河口慧海のことを述べたことに対し、まわりの日本人が慧海の悪口を吹き込んだのではないか。ヘディンの慧海評は『トランス・ヒマラヤ』から『南チベット』¹³へと変わってきている。

ジオグラフィカル・ジャーナル誌の書評

英国王立地理学協会発行の地理学雑誌『ジオグラフィカル・ジャーナル』¹⁴に、出版の翌年早くも『チベットの三年』の書評が出ている。書評欄のアジアの項に、「チベット」と題したスウェン・ヘディンの『トランス・ヒマラヤ、チベットでの発見と冒険』の書評に続いて、「チベットにおけるある日本人の巡礼」と題する『チベットの三年』の書評が載っている。両者の本は1909年同年に出版された。次のように、河口慧海の本は高く評価された。

この一日本人僧の筆になる体験記は、チベットにおける三年間の探検と滞在を扱っている。ヨーロッパのそれでないアジアの観点から、その珍しい国を忠実に描くことで、多くの特

殊な興味がそそられる。サラット・チャンドラ・ダスの有名な日誌が強くわれわれの心に残っているが、その類似した話は、著者が1897年の大部分をダーズリンで過ごし、そこで堂々たる地位を保っているように見えるS. C. ダスから、教えと相談を受けるという有利な立場にたつことを考えると、驚くことはない。続いて河口慧海のネパール、チベットでの行程とやったことを略述し、

(河口慧海の旅行は) ヤングハズバンド遠征の送り出しの直前であり、当時の優勢な感情は強く反英的であった。ラサにおける日常生活、チベット人の風俗・習慣、その貿易・産業、ロシアとの奇妙な交渉、たびたびのラクダに積んだ火器・弾薬の荷の送り出しが最高点に達したこと、これらの全てのトピックスがひじょうに面白く扱われている。河口の本はS. C. ダスの古い体験記より優れた文才で組み立てられている。その豊富で最新の情報は、西洋の読者に長い間神秘的な魅力を持ち続けていた国の、恐らく最良で最新の記述となるだろう。

東洋史家ハイヤーの評価

日本人のチベット入国者を研究している東洋史家P. ハイヤーは、「日本・チベット接触の半世紀」¹⁵という論文で、河口慧海について、次のように述べる。

河口はラサに達した最初でもっとも有名な日本人であるが、もっとも重要であったとは疑わしい。その名声は第一にチベットの経験が英語で出版されたただ一人の日本人であるという事実による。彼はよき観察者であり、危機的時期のチベットにいたのである。彼は本当はそうでなかったのに、当然スパイであ

ると疑われた。その著作から次のように結論できよう。

河口はひたむきな仏教徒であったが、パッシヴィスト—消極主義者でも、ショーヴィニスト—熱狂的好戦的愛国者でもなく、むしろ国家主義的であったというのが自然である。彼は少しあとの同時代人、寺本婉雅のように政治にのめり込まなかった。ロシアのチベットへの陰謀がピークに達したときのチベットの政治情勢に対する彼の観察は重要であった。英国侵入直前で、中国の影響がほとんど衰えたときのラサの現場にいた。日本に関する限り、日清戦争と義和団の乱における日本の行動によって促された日本のチベット意識の夜明けの興味ある記録という点で、河口のチベット旅行は重要である。

河口はその素性を隠してセラ僧院に学び、ダライ・ラマに謁見し、チベットの高官と交わり、民衆に医術を施した。河口はドルジェフの行動とロシアの陰謀を観察し、ラサとネパールで経典を収集し、重要な友人をつくり、重要な初期の役に立つ観察を記録した。

インド人チベット学者ダス

サラット・チャンドラ・ダスは、河口慧海がインドへ上陸してからダーズリンを訪ね、その庇護とチベット語修得の便宜を受けた恩人である。『チベット旅行記』にも、何か所かに出ている。

「私の若い時代のできごとの記録」と副題したダスの『自伝』¹⁶が、カルカッタのアジア協会のマハデヴブラサド・サハ博士の序文をつけて、1969年に刊行された。ダスのダーズリンにおける生活、チベット探検前のイギリス役人との交渉、1879年のタシルンプーへの旅の記述、

1881-82年の旅の背景が含まれる。

そのサハの序文の中に、ダスと河口慧海のことが書かれている。

ダスは1917年1月5日のその死の数か月前、家族みな反対にもかかわらず、再び日本へ行くという決定を発表した。これがいつもの彼のやり方であった。

1915年の初秋のある晴れた午後であった。日本の仏僧であり旅行家である河口慧海がカルカッタのマニクタラ街のダスの家の椅子に座り、ダスはソファで読書していた。とくにするのがなければソファによりかかるのが、少なくとも晩年の数年の間のダスの習慣であった。

夫の日本訪問をあきらめさせることに失敗して、ダス夫人は河口慧海に、夫を無事にカルカッタへつれ戻してくれるよう約束をとりつけようとしたが、この日本の旅行者は返事をためらった。まじめなことにもつねにユーモアを贈ることを忘れないダスは、からの実にまつわる仏陀のよく知られたたとえ話を、慧海に思い出させた。かつて子を亡くした女性が仏陀の前に行き、子を生き返らせてその力を見せて欲しいと頼んだ。仏陀はその女性にある儀礼をするために必要なからの実を、死者を出したことのない家からもってくるように求めた。その女性は家々を探しまわったが、死者を出したことのない家など見つけれなかった。彼女は死の避けられないことを覚った。

ダスは持病から一時的にせよ回復したが、後に結局亡くなったという事実から、ダス夫人の憂慮は、理解されよう。

ダスの計画をあきらめさせようという試みは、結局くじかれた。彼は翌日船便を予約し、次の船で日本への航海にでた。67歳であった。

彼の主な目的は日本の有名な仏蹟を訪れ、仏教の現状を見ることであった。

実際1915年9月、河口慧海は第二回チベット旅行から帰国の時、ダスと四男の息子をつれて帰り、写真入りで大きく報道されている¹⁷。

その序文には、チャールス・ベルの『チベットの過去と現在』¹⁸の中のダスにふれた部分を引用し、次いで河口慧海の『チベット旅行記』中のダスについての記述を三か所引用する。

日本の仏僧、1909年マドラス出版の『チベットの三年』の著者、河口慧海はサラット・ダスの弟子であり、インドのグル（導師）のスタイルでチベット旅行に出発する前、前世紀末の一年間ダーズリンで一緒に住んだ。

ダスは二度チベットに密入国したが、慧海がチベット人から聞いたこととして、ダスが用心して昼間出歩かなかったこと。ダスの入国が後でチベット政府の知るところとなり、彼とつきあった人々が下獄し、外国人の入国が厳しくなったこと。ダスのことはチベットで子供にもよく知られており、スクール・バブ（校長）と呼ばれていること。

1984年に編集刊行されたダスの『チベット研究』¹⁹は、『アジア協会ベンガル分会誌』に載った19論文（1881-1907）、主にチベットの宗教・歴史に関するものを収録したものである。編集者のアラカ・チャトパディヤヤの、「サラット・チャンドラ・ダス以前のチベット研究」と題する長い序説に、河口慧海の『チベット旅行記』のダスを引用している。しかしこれは前記サハの序文からの孫引きのようである。

ダスの『チベット語文法序説』²⁰の付録に、パンチェン・ラマからとブータンのブムタン知事（ブータン王家の祖）から、それぞれ河口慧海にあてた手紙が載っている。さらにダーズリンで撮影されたチベット僧衣を着用した河口慧

海の写真と、「チベットの聖域への河口慧海の巡礼の記録」と題した河口慧海作チベット語による詩が掲載されている。その詩はJ.シューベルトによってドイツ語訳され紹介された（*Artibus Asiae* VI）。

デシダリの『チベットの報告』と慧海

18世紀のチベット社会を活写した記録を残したのが、I. デシダリの『チベットの報告』²¹である。デシダリはカトリック・イエズス会の宣教師で、18世紀前半、苦勞の末ラサ入りを果たし、チベット語を学び熱心に布教した。その布教自体は成功したとはいえないが、当時の社会の詳細な記録を、われわれに残してくれた。

その報告を編集、英訳し、まとまった本をつくったのが、医師であり、登山家、探検家であったF. デ・フィリッピである。残された文書が詳細に検討され、英訳され、しかもC. ウェッセルズによる詳細で有益な注がつけられた。英訳本は初版1931年、再版1937年。この注には、多くのチベット関係文献、記録による比較検討が加えられている。

この注の中には、慧海の『チベットの三年』から13か所も引用されている。第一篇「ラサへの旅」では、経文の紙、第二篇「国土、習慣、政治」ではチベット人の起源伝説、きびしい気候、サキャ寺、「汚物の町」ラサ、セラ大学と学生生活、乾し肉、医師事情、結婚や家庭、ダライ・ラマの葬儀にわたり、第三篇ではダライ・ラマの転生、ンガクパ（修験者・真言者）である。第二篇の注でチョカン寺に言及していないことを指摘しているが、慧海は『チベット旅行記』第64回に「釈迦牟尼仏の大堂」と簡単にふれている。

ラサの日本人の新年宴会

河口慧海が二度目にラサ入りをしたとき、そこには慧海を含めて四人の日本人がいた。互いにどのような感情をもっていたのであろうか。誰の記録にもあまり残されていない。慧海の『第二回チベット旅行記』²²に収録された「入蔵記」に三人の簡単な紹介がある。しかも矢島の名が保治郎であるのに保二郎と誤っている。三人の通った道を述べ、「予の採った道から見れば三氏の行路は、より以上楽な路である」とライバル意識をのぞかせている。さらに多田等観についてはセラ大学の同じ学僧院にいたと書いている。

ただ『河口慧海師畧傳並年譜』²³に「大正四(1915)年一月一日、ラサ在住の日本人即ち多田氏、矢島氏、青木氏等四人にて新年会を催す」とある。慧海以外の人の記録にないことから、これを否定する人もあるが、慧海の「続チベット旅行記」原稿(未刊)にも「大正四年一月一日になった。自分はとくにラサにいたところの日本人を集めて宴会を開いた。もとより禁酒であるから、酒はなくともただ一番楽しみとするところは、日本語でたがいに談話を交換することのできるのを、大御馳走として宴を開いたのであった。かくて茶菓子など食ひ、粗末なる昼餐を取り、簡単なうちに宴を終わった。」と書かれている。1915年といえば第一次世界大戦の最中である。この時禁断の都ラサに、四人もの日本人がいたとは驚くほかはない。

青木文教の『秘密の國・西藏遊記』²⁴には、「日本僧の入寺」のところに慧海と多田、「拉薩の日本人」のところに三人のことが書かれている。帰国後宗教紙上で論争し、裁判沙汰近くにまでなる二人の関係からは、想像できない書き方である。慧海が宗学の研究に熱心で、名医

の評判が高かったこと、「河口氏と予とは隣同様の近い所から自然よく往来し」たが、「四人が同時に会合するという機会は一兩回しかなかった。」という。

多田等観と河口慧海

多田等観は「思い出」に、慧海と1912年ダージリンで初めて会い、ダスを紹介してもらったこと、ラサで慧海の宿舎を訪ね、自分のために肉料理を作らせ、苦しい寺院生活を慰める慧海の心遣いを思い出している(河口正『河口慧海』⁴)。

多田は『十三世ダライ・ラマ』²⁵なる英文の本を、東洋文庫内にある東アジア文化研究センターの出版物として出している。1913年から23年までチベットに滞在し、ダライ・ラマの信任を得た多田であるので、見聞きしたことを含めて、コンパクトではあるが、優れた評伝となっている。その中の最終章「日本からの訪問者」のところに、河口慧海についての記述がある。

私(多田)はチベットに入った初めての日本人ではない。河口慧海が1900年7月ラサに入った。たまたまダライ・ラマの気分がすぐれないということがおこった。河口慧海は侍医の紹介によって、ダライ・ラマの病気の診断をしたといわれている。しかしながら私がそれについて尋ねたところ、はっきりした答えを得られなかった。河口がその第1回チベット訪問中、ダライ・ラマに会ったかどうかははっきりしない。1914年ラサへ第2回の旅行をし、仏教の本を集めた。そのときは私はラサに滞在中であったが、彼はダライ・ラマに謁見できなかった。彼のチベット入国の目的について、私はその書いたものでしか知らない。ただ彼がパンチェン・ラマの協力の本を集めたのは知っている。チベット大蔵経仏部は、の

ちにパンチェン・ラマが中国に亡命したときの贈り物であった。それは現在東京の東洋文庫に収められている。

このように多田等観は河口慧海のダライ・ラマ謁見に対しても否定的である。『チベット旅行記』には、慧海がダライ・ラマの病気を診たとは書かれていない。侍従医長の話では、別段法王にはご病気ということはないとさえ書かれている。法王からは「長くセラにとどまって僧侶及び俗人の病気を治すようにしてくれろ」「いずれまた相当の官にお前を用いたいと思うて居る」との言葉を賜ったという。『河口慧海師畧傳並年譜』²³には「明治三十四(1901)年七月二十日、法王に謁す、医者として優待せらる」と書かれている。

矢島保治郎は「河口慧海師の登場」との見出しで、「ダーズリンでは河口慧海師が西藏を狙って入国の準備おこたりない時だったし、……青木文教氏が、これまた機を狙って苦心惨憺の最中であつた」と書き、多田については「はげしい修行と望郷の念に神経衰弱気味になっていた」という²⁶。

ところが河口慧海は三人の日本人を次のように紹介しているのは興味深い。「西本願寺の青木文教という人とやはり真宗僧で多田等観と名乗っている人物、今一人はシナ浪人と自称していた豪傑じみた男であつた」と、矢島保治郎の名を書いていない。青木がネパール経由、多田がブータン経由でチベット入りしたので、英国からネパール、ブータン国王が厳しい談判をもちこまれ、恐れて国境を固めている（「西藏入国記」『大阪毎日新聞』1915.9.8²⁷）。矢島の通ったチュンビ谷の本道は第一回の帰路であり、顔の知れている慧海はやむなくシッキム経由の道をとった。「河口慧海の会（慧海忌）」に多田等観が見えたことがある。確か亡くなる前年

かと思う。また多田は講演で、ダライ・ラマに正式に招待されて行ったのは私が初めてだといったという。互いにライバル意識があったように思える。

能海寛の消息

チベット入りを志して消息を絶った能海寛の捜索依頼を、その家族から、河口慧海は受けている。その旨を記した手紙（能海の家族から依頼を受けた南條文雄発の返信、島根県金城町歴史民俗資料館所蔵、堺市博物館「河口慧海展」で展示）が能海の遺族宅に残っていた。

慧海は『チベット旅行記』の中で、能海寛の名を二か所挙げている。慧海はネパール西北のムスタン地方のツァーラン村に一年近く滞在しているが、その間にダーズリンのサラット・チャンドラ・ダスと通信している。ダスからの返書の中にあつたマハーボーデ・ソサイティの雑誌に、大谷派の能海寛がチベットの国境まで行ったが追い返されたという記事が、日本の新聞からの翻訳で載っていた。同行の寺本の通信とあつた。ダスはこの記事を示して、慧海のチベット入りをあきらめさせようとしたと思われる。次いで「外国のチベット探検者」のところに「我が国の能海寛師もそこ（シナ領と法王領との境目即ちバーリタン）まで行ってどうやら追い返されたようです」と書き、1903年の時点でそれ以上のことは書いていない。慧海が寄宿していた前大蔵大臣宅で、現任大蔵大臣の話として、日本の二人の僧を追い返したということが出ている。

河口慧海は第二回チベット旅行から帰国した1915年9月以降か翌年に、明治聖徳記念学会で講演したが、その記録が『同學會紀要』²⁸に載っている。そこには慧海が能海寛の妻から、直接

消息を求める依頼を受け、写真をもって行って尋ね廻ったことが書かれている。慧海は講演でインドとチベットの地図を示してチベットへの道の困難さを説明し、次のように述べている。

東から行けば高い処が余程少なくて路は楽であります、盗賊が多い。カムからアムドと云ふ地方は強盗の本場である。……私は明治三十年六月に日本を立ちましたが、其翌年十二月に東本願寺派の僧で能海寛氏と寺本婉雅氏との両人が西藏を指して行った。支那を経て行きましたが、リタンと云ふ処まで行って止められてチントまで後戻りして其処から寺本氏は日本へ帰られ、能海氏は再び一人で西藏へ入られた。其時は路を変えて雲南の方から入った。それが丁度今から十五年程前であります。其後杳として消息がない。私が三十六年に帰って参りまして三十七年に再び西藏へ行くと云ふことが定まった時分に、其能海寛氏の細君がわざわざ石見国から東京に出て来られて、私の宅へ参って、能海氏の写真を見せて、斯う云ふ人を貴下は御覧にならなかったかと云って尋ねられた。……彼細君は頼みました、今度再び行かれると云ふことであるから何うか此写真を持って行って捜して呉れと言われまして、私は其写真を携えて行っていろいろの人に尋ねました。二度目に行った時には私は日本人と云ふことを初から標榜して這入ったのであるから遠慮会釈はない。殊に西藏政府のお客さんとして取扱われて非常に歓待されましたから、政府の人或は其地方の行商とか又は巡礼者とか、いろいろの人に其写真を見せて聞きましたけれども、どうも斯う云ふ人に会った覚はないと答えるばかりで遂に其行方が分らない。……強盗の為に殺されたか、或は雪の為に埋められたか、何うなったか分かりませぬけれども、兎に角此

十五年間と云ふものは全く行方不明である。気の毒なことであるけれども、其お方は遂に歿くなってしまった。

慧海をめぐる人々

『チベット旅行記』に載っているように、河口慧海はチベット脱出後インドで、哲学館（東洋大学の前身）創設者であり慧海の師である井上圓了に会った。井上は慧海の帰国前、すでに「西藏探險僧河口慧海」²⁹と題した紹介文を雑誌に載せている。井上は慧海にカルカッタで会ったが、慧海がネパール行き準備のためダーズリンに帰るのを好機として同行している。井上のダーズリン行きは『チベット旅行記』でも簡単にふれられているが、この紹介文には、ダーズリンでの慧海の評判を記している。慧海が無事にチベットを脱出できたのは、仙術で空中を飛んだからという風評を実際に聞き、出会ったチベット人は慧海に舌を出して最敬礼をするのを観ている。

仏教や禅を世界に広めた鈴木大拙は、河口正著の伝記『河口慧海』⁴の序に寄せて、次のように述べる。「自分が河口君に初めて会って、二三个月の間起居を共にしたことがあるのが、今からざっと六十六年ほど前のこと。それは今は横浜市の三会寺というお寺で釈興然師の下で、パーリ語を習った時である。河口君は自分よりも五六年上の方で、背の高いすらりとした人であった。何だか一癖あるやにも感ぜられた。」「チベットで発展した仏教思想もこれからの世界文化に対して示唆するところ、必ずあるべしと信ず。河口君の一生も、その点から見て、意義をもつというべきだ。」「先覚者の一人として今は亡き君に敬意を表する。」

インド学の先達

日本のインド学は、南條文雄に始まり、高楠順次郎によって引き継がれていったといわれている。彼らはいずれもヨーロッパに学んだ。南條は東本願寺から派遣されて英国オクスフォード大学に留学、インド学、言語学、宗教学の権威 F. M. ミュラー門下として、サンスクリット（梵語）を修めた。南條の東京帝大講師就任が1885年、慧海の上京は1888年であり、慧海は哲学館で南條の教えを受けている。慧海在学中の1890年の哲学館学科表の担当講師の中に、南條の名がみられる。慧海はチベット旅行中、南條から消息を尋ねられているし、1909年、慧海がインド滞在中に出した手紙の控えが残っている。それには慧海が南條から手紙と雑誌一二冊を送ってもらったことに感謝し、旅行記英訳の仕事に忙しくご無沙汰したこと、仏教梵典の研究を始めようとする、庭の菩提樹の新芽を同封したことが述べられている⁴。

高楠は養家の後援によってヨーロッパに留学、英国、ドイツに学び、帰国後1901年東京帝大に梵語学講座を創設、初代教授に就任した。慧海の第二回旅行からの帰国時、高楠は神戸に出迎えている。慧海と高楠は同年である。

河口慧海と一緒に釈迦生誕地ルンビニとカトマンズへ行ったインド学の高楠順次郎は、1913年12月16日東京地学協会例会の「ネポール国に就いて」³⁰と題した講演で次のように述べている。「ネポールに……日本人で行ったのは河口慧海という人ですが、公然許可を受けて行ったのは私が初めてであります。梵語の専門家として行ったのは世界中私が三人目であります。」つまり高楠には東大教授としての自負があるようにみられる。

また同講演でタライで二日拘留されたことを

述べている（『地學雑誌』302号³⁰）が、高楠は慧海に案内されて仏跡巡礼したのに、そのことや、慧海が折衝して罪人扱いから貴賓扱いになったことは、書かれていない。若き日に同行し、のちに黄檗宗管長になった溪道元は、その著『南亜旅行記』³¹の「河口慧海師に遇い北方仏跡巡拝の途に就く」の章にそのことを書いている。

またカトマンズのボータナート寺の客館に泊まっているが、二部屋与えられて一つに慧海一つに高楠と同行の長谷部隆諦が泊まった。「河口君はこの地方では医者になっておったので、別に部屋を一つ一人で占領しておりました。日本の喇嘛が来たといつて西藏人は慕ふて来る。

（病気が）皆治るといのでなかなかの評判である。お蔭で私の仁丹や寶丹は皆取られて無くなりました」（『地學雑誌』304号³⁰）という。

P. ランドンの著書『ネパール』³²の巻末付録のネパール訪問欧人リストに、「ミスター・J. タカ（M. A., D. Litt.）東京大学教授、ミスター・エカイ・カワグチ、氏名不詳の日本人二名1913年1月-2月梵典研究のため」とあって、なぜか高楠の名の一字が欠落している。この時点では河口慧海の方が知られていたであろう。秘密入国の1899年はもちろん、大王と会った1903年、1905年にも慧海の記載はない。なお氏名不詳の日本人二名とあるが、高楠の前記講演筆記³⁰によれば、同行したのは高野山の長谷部隆諦とインドの従僕とあって、くい違っている。

このように日本のインド学成立の初期において、現地研究の私的中心的役割を、慧海は期せずして果たしたことになる。慧海の現地研究はまことに重要なものであるが、興隆期の日本の学問の多くがそうであったように、欧米の学問体系の導入が主流であり、それ以外のものは評価が低かったといえよう。

論争の人

能海寛と四川省からの入蔵を諦めて、帰国した寺本婉雅は、1900年北京におもむき、義和団の乱（北清事変）の混乱時チベット大蔵経を入手し、日本にもたらした。1903年帰国した慧海は新聞記者からその評価を求められたのであろう、それは蒙古の寺にあったのを販売の目的で北京で再版したもので、誤脱が多いと答えている（読売新聞1903.5.22³³）。

寺本は請来した大蔵経をめぐる慧海対青木の論争に中立的立場をとったといわれるが、のち自著『西藏語文法』³⁴が慧海にきつく批判された。慧海は宗教新聞の『中外日報』に「著者寺本婉雅氏に『西藏語文法』の絶版を要求す」³⁵、『日本及日本人』誌に「『西藏語文法』實證的批判」³⁶を書き、2000以上の誤りがあると指摘、批判した。そのいきさつもその双方に載っている。二人の初めての出会いは、慧海の第二回旅行から帰国の日、滞在先の大阪郊外能勢口の渡辺別荘で、高楠順次郎の紹介で寺本が訪問した。それ以来の交際で、友情のため寺本の著書の誤謬にも批評を避けてきたが、慧海の学友鷲尾順敬が中外日報に取材させた記事が、前記「絶版を要求す」³⁵である。それに対し、大谷大学の研究室が反論、「答弁の価値なしで結論」という表題の記事となった（中外日報1922.12.9）。その再反論、批評が「實證的批判」³⁶である。

慧海は1916年からチベット文典をまとめ、9年かかって1925年に草稿を完成している（東京日日新聞1925.11.16）ので、自分の先をこされたという気持ちになかったとはいえないだろう。『西藏文典』³⁷としてのその出版はさらに遅れて1936年になる。

論争といえば、学士院賞を受賞した大村西崖

の『密教發達志』³⁸を批判、それを評した梶尾祥雲と大村の反論とともに批評し³⁹、さらに「密教發達志批判」⁴⁰と題して講演し、漢訳經典のみによる点を指摘、龍樹は密祖でない、南天と中天の密教、著者の歴史的考察と宗教的信念について、チベット密教から評論した。慧海は依頼されたとはいえ、社会でも学界でも論争をいとわなかったようだ。

ヨーロッパからの帰途、第一回西域探検後インドへ出た西本願寺の大谷光瑞が、河口慧海と会ったことは『チベット旅行記』に出ているが、光瑞はヘディンと文通し、のちに日本へ招待した。光瑞はヘディンの依頼を受けて、北京でチベット入りの許可交渉をしたが、成功しなかった。しかしヘディンのチベット探検には光瑞と慧海の二人の日本人が蔭で支えたと、金子民雄は推定する。しかし光瑞がヘディンに1910年3月に出した手紙が残っている。「あなた（ヘディン）は河口慧海について書いてくれました。私は彼についてならよく知っています。しかし、彼は全く信用できない人物です。これ以上関わられないほうがよろしいかと、私は思います」¹²。当時の学界や宗教界の雰囲気わかるような気がする。青木が帰国し慧海との論争のおこるのは1917年であるから、その7年前である。

弟子のみた慧海

河口慧海は請来した膨大な經典の翻訳や蔵和辞典の編集のために、チベット語のできる人材の養成をすべく、浄財を集めて資金をつくり、何人かの奨学金支給の研究生をとった。その中に橋本癩胤（のち薬師寺管長）、山田無文（のち妙心寺派管長、花園大学長）らがいる。

『第二回チベット旅行記』に「序」を寄せた山田無文は、河口慧海の生誕百年にあたり何の

記念行事も無かったことを遺憾とし、「それは老師が官学に属されなかったからであろうか、学閥を持たれなかったためであろうか。それともその道行があまりにも高潔で峻峻で、追従する者がなく、従って門庭甚だ寂寥であったからであろうか。その学識に於いて決して他に譲るものでなく、その苦学と力行に於いてはるかに他を凌ぎ、その業績の壮大なることに於いて、他の追随を許さぬものがあるにと、ひとりひそかに慨嘆したことであり」と記している。無文は一度「河口慧海の会（慧海忌）」に見えて、話をした。

また山田無文は、朝日新聞（1982.5.4⁴¹）に次のような回想を寄せている。中学四年のとき、「私の迷いが始まり」、「人生の目的は何か」を知るべく、説教を聞いて回るうちに、「河口慧海先生の雪山精舎」で、「入菩薩行の講義を聴」き、「自分の求めていたもの」を見つけ、「長い願文を書いて」「口頭試問など受けて弟子にしてもらった。こうして河口慧海先生は、私の人生の最初の師匠となった」。しかし弱体の無文は厳しい修行で倒れ、一年で挫折、故郷に帰り床に伏した。

慧海の最後の未完の事業であった蔵和辞典の編纂に携わった壬生台舜は、慧海の生誕百年を迎えて、その一生を略述したのち、次のように言った。「その計画は注意深く用意周到、正確緻密」「情緒安定した意思の強い性格は、正しいものには真っしぐらに向かう」「粘着気質と分裂気質の傾向の強い方で」「正しいものに対して強い行動性を示すと共に、一切の妥協を排除」した⁴²。また壬生は1994年大正大学公開講座で講演し、慧海を「意思の強い頭のいい、しっかりした人」といい、その晩年、朝9時にきちんと東洋文庫へ来、大きな弁当箱の弁当を持参し、ゆっくり30分もかけて食べたことを思い出

として語った。慧海は日本のチベット学の始祖、資料の請来、「在家仏教」の提唱という三つの大仕事をした。さらに慧海の仏教は『華嚴経』を重視したという特色を指摘した⁴³。

河口慧海の名

確かに河口慧海の帰国直後の新聞は争ってその記事を扱い⁴⁴、慧海は講演会に奔走した。第二回旅行の帰国時には、ほぼ同時に帰国した野口英世と並べて、「邦人の二大事業」として扱われた（東京朝日新聞 1915.9.8⁴⁵）。第二回旅行の資金集めには、政財界の名士も協力したが、学界や宗教界では、中傷ないし無視されたような点がある。帰国後30年たった1933年の雑誌に、「いまなお自分のチベット行きを否定している人がある」と述べている⁴⁶。

ヘディンに慧海の「英訳本」を読むよう薦めたドイツの大出版社社主ブロックハウスに対し、ヘディンは次のような手紙を書いている。「不思議なことに、彼（河口慧海）は日本ではまったく尊敬されていないのです」⁴⁷。

東京地学協会は、ノルデンショルドに銀メダル、福島安正に銅メダル、そしてヘディンに金メダルを贈った。当然贈ってしかるべき河口慧海には何もしなかったのち、あとに続く日野強にも、橋瑞超にも何も贈らず、ヘディンの金メダルで途絶えてしまった⁴⁷。

1900年から1957年にいたる明治・大正・昭和の11種の人名辞典（人事録）⁴⁸を調べても、河口慧海の名は出ていない。大正大学教授のほかは在野の一仏教徒であり続けた河口慧海としては仕方のないことかもしれない。ただ昭和5年に刊行された『明治大正史』第13巻（人物篇）⁴⁹に出ているのは珍しいが、帝国大学講師という肩書は恐らく間違いであろう。

1931年「世界探検全集」の第四巻『亜細亜探検』⁵⁰に、「河口慧海」の章が40ページにわたって入っている。玄奘、マルコポーロ、福島安正に次いで書かれ、その後スウェン・ヘディン、コズロフと続く。『チベット旅行記』をもとに二人の著者が約三万字、原文の約20分の1に要約したものである。

その名がつねに登場するようになるのは、1960年代以降の人物事典、人名事典、百科事典⁵¹である。1955年の小学校6年の国語の教科書（柳田国男編『新編新しい国語』東京書籍）にのり、探検家物語や探検史に登場する。川喜田二郎が『ネパール王国探検記』⁵²（1957年）で河口慧海のことと『西藏旅行記』を紹介し、古書の値を高め、『世界ノンフィクション全集』⁵³（1960年）、河口正著の伝記『河口慧海』⁴（1961年）あたり以後、河口慧海の名が急激に広まったと思われる。

1957年、河口慧海の13回忌にあたり、九品仏浄真寺に記念碑が建てられ、66年から「河口慧海の会」が発足、慧海の親族、弟子、ゆかりの者が年一回集まって、『佛教日課』⁵⁴を同唱し、講演を聞いた。その後、生家近くの南海本線七道駅前に銅像が、高野山に碑が建立された。1997年秋、ヒマラヤを愛した登山家で医者のご住吉薫の意思を継いで、河口慧海のレリーフ像が、ゆかりの地ボーダナートに、夫人の手で納められた。

東北大所蔵の河口慧海コレクションは、大ヒマラヤ展（東京）でその一部、大チベット展（1983年、東京・大阪）、そして河口慧海展（1993年、堺）に展示された。

〔注〕

1) Sato Hisashi 1993 The Origins and Development of the Study of Tibetan History in

Japan. *Acta Asiatica*, no. 64:81-120.

2) 河口慧海 1904 『西藏旅行記』上・下 博文館

3) 河口慧海 1941 『西藏旅行記』改訂版 山喜房仏書林

河口慧海（高山龍三校訂）1978『チベット旅行記』全5冊 講談社 ほか

4) 河口正 1961 『河口慧海』春秋社

5) L. A. Waddell 1905 *Lhasa and its Mysteries*. Murray, London.

6) P. Landon 1905(78) *Lhasa*. 2 vols. Hurst & Blackett, London. (Kailash, Delhi.)

7) E. Candler 1905(81) *The Unveiling of Lhasa*. Arnold, London. (Cosmo, New Delhi.)

8) 高山龍三 1994 「外国文献にみる河口慧海」『京都文教短期大学研究紀要』第33集 88-95

9) Ekai Kawaguchi 1909(79) *Three Years in Tibet*. Theosophist Office, Madras. (Ratna Pustak Bhandar, Kathmandu.)

10) F. Younghusband 1910 *India and Tibet*. John Murray, London.

11) S. Hedin 1913 *Trans-Himalaya*. vol.3. Macmillan, London.

12) 金子民雄 1995 「スウェン・ヘディンと二人の日本人 大谷光瑞と河口慧海」『「シルクロード」文化考』清泉文苑（第12号）別冊 52-58

13) S. Hedin 1917 *Southern Tibet*. vol.2. Lithographic Institute of the General Staff of the Swedish Army, Stockholm.

14) Reviews. *Geographical Journal*, 35-3:322-325. 1910.

15) P. Hyer 1972 A Half-Century of Japanese-Tibetan Contact, 1900-1950. *Bulletin of the Institute of China Border Area Studies*, no.3:1-23.

16) Sarat Chandra Das 1969 *Autobiography [Narratives of the Incidents of my Early Life]*. Indian

- Studies, Calcutta.
- 17) 「入藏僧歸る 十一年間西藏, 印度に在りし河口慧海師」『大阪毎日新聞』1915.9.4
- 18) C. A. Bell 1924 *Tibet ; Past and Present*. Clarendon, Oxford.
- 19) Sarat Chandra Das 1984 *Tibetan Studies*. K. P. Bagghi, Calcutta / Delhi.
- 20) Sarat Chandra Das 1915(1972) *An Introduction to the Grammar of the Tibetan Language, with the Texts of Situ Sum-Tag, Dag-Je Sal-Wai Melong and Situl Shal Lung*. Darjeeling Branch Press, Darjeeling. (Moptilal Banarsidass, New Delhi.)
- 21) F. de Filippi 1931(37) *An Account of Tibet. The travels of Ippolito Desideri of Pistoia, S.J., 1712-1727*. George Routledge & Sons, London. [薬師義美訳 1991, 92『チベットの報告』1,2 平凡社]
- 22) 河口慧海 1966(81) 『第二回チベット旅行記』河口慧海の会(講談社)
- 23) 宗川宗満・服部融泰編 1927 『河口慧海師畧傳並年譜』河口慧海師後援会
- 24) 青木文教 1920(1990) 『秘密の國・西藏遊記』内外出版(中央公論社)
- 25) Tada, Tokan 1965 *The Thirteenth Dalai Lama*. The Centre for East Asian Cultural Studies, Tokyo.
- 26) 矢島保治郎 1940 「東洋秘密國西藏潛入行」読売新聞社編『支那邊境物語』25-58 誠文堂新光社, (初めの部分を省略して『入藏日誌』1983 チベット文化研究所刊 第二部に所収)
- 27) 河口慧海 1915 「西藏入國記」『大阪毎日新聞』大正4.9.5-11, 13-15.
- 28) 河口慧海 1916, 17 「西藏文明の起原及現状」『明治聖徳記念學會紀要』5:87-105, 7:157-176
- 29) 井上圓了 1903 「西藏探險僧河口慧海」『加持世界』2-2:36-38
- 30) 高楠順次郎 1914 「ネポール國に就いて」『地學雜誌』302:97-108, 304:271-279, 305:349-357
- 31) 溪道元 1962 『南亜旅行記』
- 32) P. Landon 1928(76) *Nepal*. 2 vols. Constable, London. (Ratna, Kathmandu.)
- 33) 「西藏探險僧歸る」『讀賣新聞』1903.5.22
- 34) 寺本婉雅 1922 『西藏語文法』内外出版
- 35) 河口慧海 1922 「著者寺本婉雅氏に『西藏語文法』の絶版を要求す」『中外日報』6965-6968 大正11.11.30-12.3.
- 36) 河口慧海 1923 「『西藏語文法』實證的批判」『日本及日本人』861:59-76
- 37) 河口慧海 1936 『西藏文典』大東出版社
- 38) 大村西崖 1918 『密教發達志』
- 39) 河口慧海 1919 「驚異すべき事實と二大極端論の衝突」『高野山時報』151:2-6
- 40) 河口慧海 1920 「密教發達志批判」『秘鍵』345 合号 36-56
- 41) 山田無文 1982 「河口先生の『入菩薩行』講義」『朝日新聞』1982.5.4
- 42) 壬生台舜 1963 「河口慧海老師の生誕百年を迎えて」『日本西藏学会々報』13号1-2
- 43) 壬生台舜 1995 「河口慧海先生の思い出」『河口慧海の世界』5-14 大正大学
- 44) 高山龍三 1996 「河口慧海『西藏旅行記』の成立」『京都文教短期大学研究紀要』第34集 37-46
- 45) 「邦人の二大事業(河口師と野口博士)」『東京朝日新聞』1915.9.8
- 46) 河口慧海 1933 「入藏の思ひ出」『現代佛教』105:483-487
- 47) 金子民雄 1982 『ヘディン 人と旅』白水社
- 48) 『日本現今人名辭典』1900 同發行所(『明治人名辭典』II 1988) 『現代人名辭典』第二版 1912 中央通信社(『明治人名辭典』I 1987)

- 『大日本人物誌 一名現代人名辞書』1913 八紘社
 (『明治人名辞典』Ⅲ 1994)
- 『日本人名辞典』1914 思文閣
- 『大正人名辞典』第四版 1918 東洋新報社 (『大正人名辞典』1988)
- 『大衆人事録』昭和三年版 1918 帝国秘密探偵社
 (『大正人名辞典』Ⅱ 1989)
- 『大日本人名辞書』増訂十一版 1937 講談社
- 『新撰大人名事典』1937-41 平凡社 (『日本人名大事典』1979)
- 『大衆人事録』第十四版 1942 帝国秘密探偵社
 (『昭和人名辞典』1987)
- 『大衆人事録』第十九版 1957 帝国秘密探偵社
 (『昭和人名辞典』Ⅱ 1989)
- 『日本人事録』全国篇第6版 1963 中央探偵社
 (『昭和人名辞典』Ⅲ 1994)
- 49) 『明治大正史』第十三卷(人物篇) 1930 実業之日
 本社 (『大正人名辞典』Ⅲ 1994)
- 50) 原田三夫・松山思水 1931 「河口慧海」『世界探検
 全集 第四卷 亜細亜探検』萬里閣書房 119-166
- 51) 『国民百科事典』1961 平凡社
 『日本百科大事典』1963 小学館
 『明治人物逸話辞典』1965 東京堂
 それ以後の人物事典, 人名事典, 百科事典などには,
 大小ほとんど出ている。
- 52) 川喜田二郎 1957 『ネパール王国探検記』光文社
- 53) 河口慧海(河口正編) 1960 「チベット旅行記」『世
 界ノンフィクション全集』6:3-181 筑摩書房(現代語
 抄訳)
- 54) 河口慧海 1922 『佛教日課』 仏教宣揚会(1927年以
 降在家仏教修行団発行となる)

Kawaguchi Ekai: Evaluations and Personal Connections

Ryuzo Takayama

Kawaguchi Ekai (1866-1945) was a Japanese monk who spent several years in Tibet (1900-02, 1914-15), and is described by a prominent modern Tibetologist, Sato Hisashi, as one of the founders of Tibetan studies in Japan.

This paper reviews evaluations of Kawaguchi's work by non-Japanese scholars and sketches the network of personal connections between Kawaguchi and other Japanese who ventured into Tibet and Nepal during the early 20th century.

The first person outside Japan to take note of Kawaguchi's work was F. Younghusband, in his book *India and Tibet* (1910). Kawaguchi's own work, *Three Years in Tibet* (1909), was reviewed in the *Geographical Journal* (1910) in the year after its publication. More recently (1972), oriental historian P. Hyer has refuted the canard that Kawaguchi was a spy, discribing him as "a dedicated Buddhist", and as "nationalistic rather than chauvinistic".

Kawaguchi is also referred to by the editors of two separate works, *Autobiography* (1969) and *Tibetan Studies* (1984) by the Indian Tibetologist S. C. Das. *An Introduction to the Grammar of the Tibetan Language* (1915) by S. C. Das carries Kawaguchi's Tibetan-language poem, 'An account of the Pilgrimage of Ekai Kawaguchi to the Great Sanctuaries of Tibet'. C. Wessels refers to Kawaguchi's work 13 times in the notes of *An Account of Tibet* (1931)

by I. Desideri.

As for Kawaguchi's personal connections with other travellers and Indologists of his age, he is known to have had a new year lunch in Lhasa with three other Japanese, Tada Tokan, Aoki Bunkyo and Yajima Yasujiro, during his second visit to Tibet. Tada Tokan was suspicious of Kawaguchi, however, especially regarding his audience with the Dalai Lama. Kawaguchi was asked for any news about the monk-explorer, Nomi Yutaka, who had entered Tibet and whose whereabouts were unknown from his wife.

Kawaguchi also served as guide to his teacher, Inoue Enryo, when the latter visited India. Inoue subsequently wrote of Kawaguchi's Tibetan sojourn in a magazine article published before his return. Suzuki Daisetsu, a Buddhist scholar who was from the same temple as Kawaguchi, wrote in the foreword of Kawaguchi's biography, "I respect you as a pioneer." Kawaguchi corresponded with another of his teachers, Nanjo Bunyu, from India, and was Takakusu Junjiro's guide when he visited Buddha's birthplace and Kathmandu. In these various ways, Kawaguchi was a key figure in the early development of Indology in Japan.

Kawaguchi was a controversial figure, who did not hesitate to criticize works such as Omura Seigai's *A History of the Development of Tantric Buddhism* (1918) and Teramoto Enga's *A Grammar of the Tibetan Language* (1922). Otani Kozui described Kawaguchi as "untrustworthy" in a letter to S.Hedin, and Kawaguchi's disciple, Yamada Mumon, recalls him as "a severe teacher".

In twelve biographical reference books published between 1900 and 1957, Kawaguchi appears only once. From the 1960s onward, however, he has generally been included.